マイウェイ my way

伊藤製作所社長

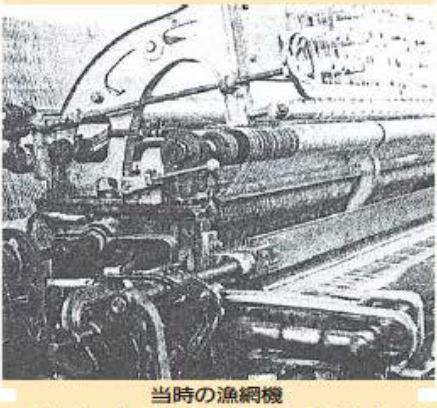
伊藤　澄夫　10

「金型をやれ」

伊藤製作所には1965（昭和40）年4月に入社した。前年に工業団地に移転していたので町工場から一変、会社らしくなっていた。石油化学コンビナートが林立する四日市市は当時、水俣市と並ぶ公害の町と呼ばれており、「四日市ぜんそく」が社会問題にもなっていた。工場が排出する煙がぜんそくの原因であるとの判例が出たことで、市民団体のデモや苦情の矛先は中小企業にも向けられていた。

当社は真ちゅう鋳物を生産していた関係上、煙突から亜鉛の煙が出ていた。親父はさまざまな苦情に思い悩んだ末、資金的な余裕はなかったが工業団地への移転を決意した。しかし、こうした市民団体のお陰で、四日市は見違えるような環境の良い町となったともいえる。

四日市市の地場産業は万古焼と漁網、鋳物などである。当時、漁網会社は絶頂期で、「ガチャ万」と言われていた。漁網機械が一度ガチャンと鳴ると1万円もうかると言う意味だ。市内のキャバレーに繰り出す旦那衆の半数以上は漁網関係者だったという。そんな時代に当社は漁網機械の消耗部品であるシャトルを生産していたので業績は安定していた。



当時の漁網機

父親の決断力と先見性

入社した直後、父親から「お前は漁網機の仕事はしなくてよい」と突然言われて驚いた。「今やっている仕事の技術などは、そのうち韓国や台湾に取って代られる。これからは金型だ。金型の技術を上げればあらゆる顧客にアプローチできる」と。

先代は「企業の寿命は30年というが、時代に相応できる技術を身に付ければ永遠に存続できる」と言うのだ。長年やってきた自慢の仕事を息子に引き継ぐのが親心ではないのかと、複雑な思いがした。しかし当社が現在に至るまで高い技術力と業績を維持できているのは、50年以上も前の父親の決断のお陰だと感謝するとともに、その先を読む力に感心している。

ただその当時は順送り金型の教科書や見本などはなかったので、受注するたびに研究しながら作るという手探り状態だった。納品しては返品の繰り返しで、利益が出るまでに7年以上もかかった。漁網機部門の古参社員などは「息子はいつまでもうからないことをやっているのか。メインの漁網部門の仕事を覚えなくて良いのか？」と不満を口にしていた。